

図書館が身近になる！ i-Lib KISS

Digital Library with Knowledge Integration Service System

☆ 沿革 ☆

1953年	国士館大学附属図書館設立
1998年	世田谷キャンパスに、中央図書館新築 中央図書館・鶴川図書館・多摩図書館の3館に、(株)リコーの図書館管理システムパッケージ LIMEDIO を導入
1998年4月	OPAC 公開、本格的 CD-ROM 検索等の情報サービスを開始
2000年6月	Windows サーバ(Terminal server、IIS、File)増設 各種商用データベースのオンラインサービスを開始
2000年7月	図書館の整備概念「統合学習環境」を発表 ⇒ 学習のあらゆるシーンが図書館で体験できるよう機能統合 図書館地域開放→一般公開利用開始
2000年10月	i-Lib kiss の基本計画策定 ⇒ 利便性＝学習や研究、業務プロセスの負担低減
2002年10月	鶴川図書館拡張・情報化工事終了・開館、 kiss 稼働、中央図書館に Live 配信、24-7オープンコーナー開設 ブロードバンド時代の図書館サービスの在り方提言 ⇒ 図書館に統合した全メディア情報の、ユビキタスなアクセス実現
2003年7月	統合知識情報サービスシステム「kiss」発表会

☆ システムの特徴 ☆

□ 4つのデータベースが検索ポータルに統合

kiss-WIN(レファレンスや学習、学生生活、業務の Q&A 履歴とその参考資料)

Web 投稿も可。大切なフェイス to フェイス窓口を後方支援

kiss-DB(紀要や学術報告書、機関紙・規定集等のデジタル資料)

Document & Digital Book and Magazine;より身近な情報を電子化

kiss-DIC(専門・時事用語等解説と参考資料、マルチメディア教材部品・作品素材)

Web 投稿も可。使える解説や要約・素材等で学習・創作作業等の支援

kiss-MA(マルチメディア教材、授業録画、記録映像、商用教育コンテンツ、Live)

Multimedia archiving Service;多様なメディアで感性も洗練

ポータル画面の内容は、トップ画面のヘルプや右フレームに示されているとおり、4つのデータベースが簡単操作で内外のデータベースと横断検索できる効果は大きい。作業プロセスの短縮が期待出来るので、情報探しや読む時間さえ減殺される超多忙な現代人の支援ツールとしては最適だ。

□ kiss Solution より多くのことを、より小さな負担で

Kiss は、図書館電子資料の検索システムだが、学内の様々な教育課題に応えるため、ブロードバンド時代の「①ユビキタスな情報アクセスを実現」し、「②学習や教育研究プロセスにおける負担軽減」や、情報発信機能をも備えた教育支援、つまり「③高度な電子図書館サービス」が、その目的である。Kiss は簡単なカタログや自動生成によるメタデータを検索に用いるので、原本のフォームやメディアを問わない。この為、普段使い慣れたソフトで作った情報やスキャンデータがそのまま扱え、いま必要な情報の蓄積や取出しが、利用者や情報を抱えている者の意向で即時簡単に行えるなど、追加や修正を含めた情報管理が最もスピーディで簡単になる。これによって、学術情報に不可欠なダイナミズム性の維持、原本の全文及び隣接情報提示、マルチメディア等で実質的なサービスを可能にしている。

□ 情報構造 未来の変化を吸収する柔軟な情報管理

kiss は、単なるベタデータが検索対象なので、RDB のようなテーブルという概念もスキーマ定義もない。このため範囲検索やカテゴリ検索ができないので、テーブル関係を擬似的に組み込んだのが”大・中・小分類”の「区分」と、データ間にツリー構造を持たせられるデータ項目「シリーズ識別子」である。また、データ構造だけでなくデータのファイル構造でも、親子関係を維持したまま登録できるなど、RDB よりもむしろフレキシビリティな、メディアやデータ特性に合わせた対応が可能だ。

□ 知識情報の循環 より身近なものを、より早く登録

kiss が通常のデータベースと異なるもう一つの点は、オリジナルの世代管理法として、利用者間の知識情報循環をシステム的に組み込んだことである。知識情報循環とは、情報の創造(書く・作る)、情報の検索(読む・鑑賞)、情報の公開(発表・出版)、情報の再利用(修正、応用)によって絶えず情報がリフレッシュされる仕組みのことだ。これは、情報の信頼維持と時経変化への対応、ダイナミズム、つまり鮮度維持、付加価値と優位性等の点で非常に大事な要素である。なお、円滑な情報循環を図るためには、利用者側の便利だけではなく管理側諸作業の負担も小さくしなければならない。Kiss は、面倒なカタログ作成作業を簡略化したので、登録の図書館作業はまるでフォルダーへのドラッグ・アンド・ドロップのように、驚くほど簡単な操作で完結する。

いまは、身近な情報が便利なソフトウェアによって容易にデジタル化できるので、より膨れあがり、今度その管理や引き出し方が問題になっている。Kiss の答えは、情報を体系づけ、かつ一元的に扱うことで、いつでも、どこからでも素早くアクセス、すなわち“ユビキタス”を可能にすることであり、システムの適用範囲は広い。

イントラネット

国士館大学
LIMEDIO

FUJITSU

フルテキストサーチエンジン構築

Webサーバ
(総合情報検索環境搭載)

検索ファイルサーバ

VOD配信サーバ
WindowsMedia StreamingServer

[kissのトップ画面(図書館ホームページ)]

インターネット

Google

横断検索

国立国会

NDL-O

Web

NICHIGAI/WE

BOOKPL

FUSI

BRIT

LIBRA

ORIGINAL 4 DATA BASE

横断検索用フリーワード入力欄

横断検索結果のヒット件数表示

□ メタデータ kiss はカタログを作る手間を省く

kiss は、ベタ・サーチの全文検索型 DB である。テキストからマルチメディアまで扱い、しかも、作成ソフトやフォーマットに拘わらず、原本をそのまま格納し、これから自動抽出したメタデータがインデックス代わりになる。メタデータは、原本と関係づけられているので、ヒットすれば原本そのものを表示・再生する。ただし、写真や音・映像のように抽出テキストを持たない原始データは、図書館員がメタデータとなるカタログ仕様を作成する。

□ テクノロジー 常識破りの TCO 抑制

kiss は、SIGMA という超高速パターンマッチングエンジンを実装した、「スーパーサーチ瞬索」(富士通)を用いた。このため、高速検索を実現しながら、Oracle などのミドルウェアが不要となり、廉価なシステムが構築できる。しかもリレーションという概念がないので、登録・更新・削除というデータ操作が軽く、基本的にはどんな時間帯でもそれが行える。なお、アーカイバは原型のままなので、システムやデータ管理者負担が少なく、結果的に人的コストを含む経費が大幅に抑制されている。

kiss のマルチメディア情報は、Windows Media Technology 9 が核となっている。したがって、ストリーミング配信のネットワーク負荷が少なく、サイバーキャンパスの種々のシーンが柔軟になる。また、コンテンツ開発者やクライアントにとって、一般に普及している無料ソフトが使えるので、利用者層の円滑な拡がり最も期待できる。

[Kiss の 特 長]



正確無比の情報を提供

制作者負担を軽減

使い慣れたソフトで作られた情報をそのまま保存

情報のダイナミズムを維持

管理者負担を軽減

変換や変質がない

元情報管理不要
新たな技術習得不要

簡単容易に更新可能
(ダウンロードと手直しだけ)

提供データを SAVEするだけ

＋フル
テキスト
サーチ

☆ コンソーシアム/フォーラム ☆

kiss の拡がりは、より身近で役立つ情報素材を求め、
相互支援を誘って諸活動を活性化

□ 図書館コンソーシアム ローカルからグローバルへ

大学における教育・研究の充実やエクステンション、そして、アカンタビリティの点から図書館の情報化は不可避だ。従って、図書館資料の所蔵状況と共に、ネットワーク上のより広域かつ多様な情報収集、適切な生産を伴った「知」の蓄積と、これへの容易なアクセスの保障という重たい課題を図書館が抱えることになった。kiss はそのソリューションである。しかし、システム資源は有限なので、いつかはシステムと機関双方の負荷分散などの対応に迫られる。このとき、その経済的・性能的負担を分かちあう協力体制として、法人格の「kiss 図書館コンソーシアム」を検討しなければならない、と考えている。しかし当面は、未来にこうした対策を持ちながら、その理解が社会に根付くまで、どこかがホスト役を担い、より多くの「知」のコレクションを続けなければならない。

□ kiss フォーラム より多くの投稿を魅力に協力体制

kiss のより健全な成長のため、各方面のあらゆるジャンルの「知」の投稿によって魅力を高め、さらに、「知」の品質維持のための“提供者＝フォーラム”の個人情報を持ち、その公開をも魅力にする。これによって、フォーラムの参加形式は双方向であるという原則を、まず築いておく。信頼関係にあるメンバーが、依頼・問合せ・照会・質問・回答・作品投稿・事務連絡などの情報コミュニケーションを、ネットワーク上で遂行する意義は計り知れなく大きい。そして、ハブとなる図書館レファレンスの役割がより重要になる。将来は、大学間だけではなく、それぞれの大学を取り巻く地域からの、アクセス内容や品質が評価されるのでコンソーシアム各機関それぞれが適切な規模のフォーラムを構成することが望ましいと考える。

☆ 将来性 ☆

Kiss は、長い人生のステージ

「生活・ビジネス・教育・研究」を支援

Kiss は、「知」への要求がある限り成長し続ける。だから、分散した kiss コンソーシアム間の横断検索の実現が重要だ。しかし、不要なものまでヒットさせ、検索リストがいたずらに増えるのは好ましくない。つまり、検索対象機関が選択できることが必要だ。こうした技術的課題をクリアできなければ、大学や社会からは認知されない。また、大学を卒えた者にまでサービスを継続するのは難題だが、今後は必須事項になると思われ、ここでも大学構成員の意識改革が求められる。真っ先に見直されるのは、比較的手を付け易い管理システムだ。Kiss は、既に文書管理などの管理システムを一部包含するから、複雑化を避けるため、これと従前のシステム間との有機的なプラットフォームが必要だ。その方向と kiss の未来は、キャンパスの情報化プロジェクトなどによって、最早、学習進捗管理をも含んだ e-Learning や Digital Curriculums 等にも対応した、①e-Education のステージと、個人のアクセス情報も図書館以外からアップロードできる kiss のワークスペース、いわゆる Online Reserve が機能的に組み込まれた②新生 kiss と Library Systems、そして、③教育事務管理システムの3つへ、合理的な統合を果たすことにあると考えられる。

これらによって、学系に拘らない kiss バーチャル学会や、kiss SIG 創造など、有意義な動きも現実みを帯びてくる。図書館が管理するこうした情報スペースとコミュニケーションのオープンな組み合わせは、インターネットのサイト検索とは本質的に異なる。出所の信頼があることによって、大学や機関の枠を超えて自由に利用され、社会の知的生産性や問題解決に貢献する新しい情報ステーションを構成して行くと思われる。

(完)